

英語教育分野

第1節 英語教育における学士力の考察

今日の国際社会は、国境や言語の枠組みを越えてあらゆる活動が進展し、地球規模での情報交流が日常化しており、世界共通言語としての英語の活用力なくしては文化的・経済的に豊かな生活を送ることが困難になってきている。

ところで、これまでの大学の英語教育を振り返ると、高等学校までの延長線上にある言語能力向上のための教育が中心となっており、卒業しても英語を実践的に駆使して、活動する力が十分に身につけていないのが現状である。

これからの英語教育に求められるものは、言語学修に偏向した教育ではなく、地球市民として言語の壁を越えて主体的に行動できるようにすることである。

そのためには、日常生活での実践的な活用に加え、専門分野の知識・技能を国際社会で活用できる実践的な英語能力が必要になる。

そこで、英語教育における学士力の到達目標として、以下の三点を考察した。

第一に英語の基本語彙や基本文法をもとに、より高い技能と運用能力を実践できること、第二に英語で情報を理解して考えをまとめ、対話を通じて情報・意見などの交換ができること、第三に専門分野の必要性に応じて、適切なレベルの英語語彙・英語表現を使用できることとした。

【到達目標】

1 英語の基本語彙や基本文法をもとに、より高い技能と運用能力を実践できる。

ここでは、いかなる専門分野においても英語を用いて意思伝達できるようにするため、高い語学運用能力を身につけさせなければならない。そのため、学んだ語彙力・文法力をさらに強化し、社会の身近な話題について、その内容を的確に把握し、与えられた課題や日常の必要に応じて、意思を伝達し、発表できることを目指す。

【コア・カリキュラムのイメージ】

語彙、文法、表現など

【到達度】

- ① 大学入学時まで培った語彙力を前提に、さらに必要な語彙を獲得し、活用できる。
- ② 大学入学時まで培った文法知識を活用して、英語でより適切な表現ができる。
- ③ 日常的な話題を読み・聞き、口頭や文章で伝達することができる。
- ④ 社会の身近な話題について英語で意見を述べ、発表・質問することができる。

【測定方法】

- ①～④は、英語の語彙力・文法知識、技能、能力の達成度を客観的試験及びCan-Doリストなどにより確認する。

【到達目標】

2 英語で情報を理解して考えをまとめ、対話を通じて情報・意見などの交換ができる。

ここでは、国際社会で課題解決や目標達成を行っていくために、世界の人々と相互理解を図ることを目指し、英語を用いて意見を形成・交換できなければならない。そのため、必要な情報を従来のメディアに加えてネット上の新たなメディアを通じて、迅速・正確に収集・理解し、有効活用できることを目指す。

【コア・カリキュラムのイメージ】

英語による多様なコミュニケーションなど

【到達度】

- ① 英字新聞やネット上の英文情報などを概括的に理解し、また英語文献を精読できる。
- ② 様々なメディアを通じてニュースや番組などを視聴・鑑賞し、その概要を伝達・意見交換できる。
- ③ 様々な英語使用者と口頭や文書で自分なりの表現を用いて意見交換することができる。

【測定方法】

- ①～③は、教員などによる評価、日本国内で普及している外部試験や各大学の多様な試験及び学修ポートフォリオ*などにより確認する。

【到達目標】**3 専門分野の必要性に応じて、適切なレベルの英語語彙・英語表現を使用できる。**

ここでは、研究交流、学会・専門誌での発表、製品開発、条件交渉などの国際的な活動を主体的に行うために、専門分野に関する英語の文献を読み、講義を理解し、課題を英語で表現できなければならない。そのためには、専門分野で使用される頻度の高い語彙と文章表現の特徴及び論理展開などを修得している必要がある。

【コア・カリキュラムのイメージ】

専門基礎分野の語彙、英語論文作成の基本表現など

【到達度】

- ① 専門分野における英語文献や英語の講義・講演などを概括的に理解できる。
- ② 専門分野におけるテーマについて英語で意見交換・発表することができる。

【測定方法】

- ①と②は、専門分野の教員と連携して、試験やプレゼンテーションなどにより確認する。

第2節 到達目標の一部を実現するための教育改善モデル**英語教育における教育改善モデル【1】**

上記到達目標の内、「英語で情報を理解して考えをまとめ、対話を通じて情報・意見などの交換ができる」を実現するための教育改善モデルを提案する。

1. 到達度として学生が身につける能力

- ① 英字新聞やネット上の英文情報などを概括的に理解し、また英語文献を読解できる。
- ② 様々なメディアを通じてニュースや番組などを視聴・鑑賞し、その概要を伝達・意見交換できる。
- ③ 様々な英語使用者と口頭や文書で自分なりの表現を用いて意見交換することができる。

2. 改善モデルの授業デザイン**2.1 授業のねらい**

英語で「読む・書く・聞く・話す」の4技能のバランスが図られていないため、社会で積極的に英語を用いる能力を身につけさせることが困難であった。多くは英語検定試験（TOEIC・TOEFLなど）対策や技能向上だけを旨とする学びであって、英語を実用とする学びとなっていない。

ここで提案する授業は、英語による文章作成や口頭発表などを行う発信型の学修活動を通じて、

学修内容の定着と実践的運用能力の向上を図るとともに、国際的な活動に英語を用いて積極的に参画する態度を身につける教育を目指すことにした。

2.2 授業の仕組み

ここでは、英語を手段としてコミュニケーションを行い、英語を用いて世界に関与できることを到達度評価の基準として考える。

短期間での学びではなく、英語の基礎から応用を含めて4年間を通した教育計画を策定し、卒業時点で学修成果を質保証できるようにする。実践的な英語運用能力を実現するために、英語の授業に加え、他の授業科目との関係性の中で授業を組み立てる。

また、社会や世界への関与を醸成できるように、ネットを通じて学びの成果を公表し、学外からの意見・評価を踏まえて振り返りを行う学修の場を提供する。なお、英語によるコミュニケーション力を高め、現実的な英語使用の場を増やすために、授業はできるだけ英語で行うことが必要である。

2.3 授業にICT*を活用したシナリオ

以下に授業シナリオの一例を紹介する。

- ① この授業は、基礎の語彙と文法及び英語の一般的な文章構成法を理解し、活用できることを前提としている。到達していない場合には、学修支援システム*のサイトにおいてグループ単位で教員及びファシリテーター*を介して、学生の能力に応じたeラーニング*を行う。
- ② グループや協働での学修を通じて、学修支援システム上に英語で情報を収集・まとめさせるとともに、英語によるスピーチ・プレゼンテーション・ディスカッション・ディベートなどを体験させて、グループで課題別に学修成果を中間的にまとめ発表させる。
- ③ 他のグループの成果を相互に評価・論評し、それらの成果や評価・論評を学修支援システムなどで参考にしながら学修成果を改良する。
- ④ 対面や学修支援システムを通じて他の教員、ネイティブ・スピーカー、実務者、専門家などから外部評価を受け、実際に使える能力を客観的に点検し、振り返りを通じて自らの英語学修の改善策を考えさせる。
- ⑤ 実際の活動場面、録画映像などの成果物を学生同士で相互評価させるとともに外部評価を加える。

2.4 授業にICTを活用した学修内容・方法

以下に学修内容・方法の一例を紹介する。

- ① 学修支援システムに掲載したグループの課題に必要な専門用語や文型などを含む英語表現を学ぶ。
- ② 英語による課題の理解に必要な基礎知識を獲得するために学修支援システム上で他の授業科目と連携して学ばせる。
- ③ eラーニング、メール、テレビ会議、SNSなどを通じて効果的な英語コミュニケーションの技法を学び、対人・異文化交流を体験する。
- ④ 課題に対する発表を教室及びネット上で行い、相互評価や外部評価を通じて発表の論理性や内容について振り返らせる。
- ⑤ 学修ポートフォリオや授業録画などを利用して学修した成果を振り返らせる。

2.5 授業にICTを活用して期待される効果

- ① グローバルな情報に積極的に接することができ、多様な英語情報を理解・分析して学びに活用することができる。
- ② 世界中の人々と英語で様々な問題についてオンライン・オフラインで意見交換し、理解を深め

ることができる。

- ③ 外部の意見や評価をネット上や対面で受けることで、発表の論理性や発表内容について振り返りができる。

2.6 授業にICTを活用した学修環境

- ① 学内外での授業交流、意見交流するための学修支援システムやSNSなどのプラットフォーム※が必要である。
- ② 学修ポートフォリオシステム、ネット上での学びを支援するファシリテーターが必要である。
- ③ 外部に情報を公開し、意見を求める際の注意事項、誹謗・中傷などへの対応策を決めておく必要がある。

3. 改善モデルの授業の点検・評価・改善

この授業の点検・評価・改善は、診断テスト、到達度テスト、アンケートや学修ポートフォリオ、外部の実務者の評価などを用いて、英語の教員・関連分野の教員が授業の進行・内容・成果及びコミュニケーション能力を評価シートに基づいて点検する。さらに、授業の質保証を担保するために学内外を通じたコンソーシアムのアドバイスを受ける（表）。

表 評価シート

教育改善モデル【1】の評価シート例

1. 授業のねらいの達成度評価

| 評価項目 | 英語教員 | 関連分野教員 |
|---------------------------------------|-------|--------|
| 印刷物やネット上などの英文文字情報から必要な内容を的確に取得・理解できたか | | |
| 放送やネット上などの英文音声情報から必要な内容を的確に取得・理解できたか | | |
| 取得した情報や自分の考えを的確に英語で伝達できたか（口頭） | | |
| 取得した情報や自分の考えを的確に英語で伝達できたか（文書） | | |
| 様々な英語使用者と自分なりの表現を用いてスムーズに意見交換できたか（口頭） | | |
| 様々な英語使用者と自分なりの表現を用いてスムーズに意見交換できたか（文書） | | |
| 外部評価者に対して英語で適切かつ効果的に成果発表ができたか（口頭） | | |
| 外部評価者に対して英語で適切かつ効果的に成果発表ができたか（文書） | | |
| 国際的な活動に英語を用いて積極的に参画しようとする態度が身についたか | | |
| | | |

2. 授業システムに対する評価

| 評価項目 | 英語教員 | 関連分野教員 |
|--|------|--------|
| 英語運用能力の到達目標がきちんと示されたか | | |
| 英語コミュニケーションに必要な各種の能力の指導はきちんと行われたか | | |
| 英語によるコミュニケーション活動は適切かつ積極的に行われたか | | |
| グループ学修や協働学修が有効になされ、相互の学び合いが促進されたか | | |
| 関連分野の教員との連携は効果的になされたか | | |
| ICT環境は効果的に活用されたか | | |
| 外部評価者の選定とコーディネートは的確になされたか、また外部評価は効果的に行われたか | | |
| 学生同士による実際の活動場面、録画、成果物などの相互評価は効果的に行われたか | | |
| 授業が十分に英語で行われたか | | |
| ファシリテーターによる指導、解説は有効に機能したか | | |

4. 改善モデルの授業運営上の問題及び課題

- ① 他の授業科目との連携が実質的に図られるようにするため、大学の学部・学科のガバナンスとして、教員同士による授業協力のシステムを構築することが不可欠となる。
- ② グループや協働での学修を積極的かつ円滑にするため、上級学年生や大学院生によるファシリテーターを大学のガバナンスとして制度化し、学生目線での相談・助言が実現できるようにする。
- ③ 外部評価者の選定と依頼、外部評価の方法を考慮する必要がある。
- ④ 卒業時の学修成果の到達度評価について大学・教員間で基準を申し合わせておくことが必要となる。

英語教育における教育改善モデル【2】

上記到達目標の内、「専門分野の必要性に応じて、適切なレベルの英語語彙・英語表現を使用できる」を実現するための教育改善モデルを提案する。

1. 到達度として学生が身につける能力

- ① 専門分野における英語文献や英語の講義・講演などを概括的に理解できる。
 - ・アカデミック・ポキャブラリーとして各分野共通の570語彙に加えて分野別に頻度の高い専門語彙を理解し、活用できる。
 - ・分野に特有な文型、慣用表現、文章構成法などの表現方法を理解し、活用できる。
- ② 専門分野におけるテーマについて自分の考えを英語で作成し、発表することができる。
 - ・分野に必要な教養と専門知識を修得し、利用できる。
 - ・専門分野について英語で理解し、英語で発表できる。

2. 改善モデルの授業デザイン

2.1 授業のねらい

英語の学びが運用能力の技法に偏向しているため、専門分野を学ぶために必要な英語力が身につけていない。これまでの英語教育の多くはTOEIC、TOEFLなど英語検定試験対策や技能向上だけを目指す学びであって、英語を実用とする学びとなっていない。

ここで提案する授業は、専門分野をグローバルな視点で理解できるようにするため、国際的な動向や考えを英語で理解し、英語で表現・発信できる能力を目指すことにした。

2.2 授業の仕組み

ここでは、4年間または6年間のカリキュラムを通じて、専門分野で英語を活用できる能力を身につけさせるために専門科目と英語の統合授業を前提とする。英語で専門分野のレポートを作成し、発表できることを到達度の評価基準として考える。

このため専門教員と英語教員が連携して指導を行うプラットフォームを構築し、専門知識は専門教員が、英語は英語教員が対等な関係を保ちながら協働教育を展開する。また、学生にはグループでの協働学修による学びの場、ネットを通じて学びの成果を公表する場、社会の評価を受けて振り返りを行う場を提供する(図)。

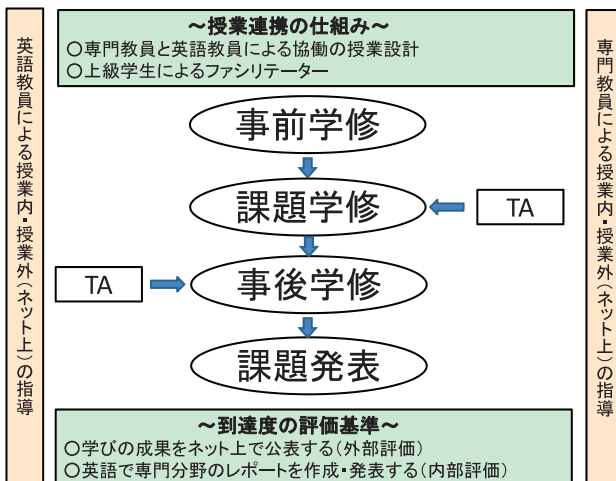


図 授業の仕組み

2.3 授業にICTを活用したシナリオ

以下に授業シナリオの一例を紹介する。

- ① この授業は、基礎の語彙と文法及び英語の一般的な文章構成法を理解し、活用できることを前提としている。到達していない場合には、学修支援システムのサイトにおいてグループ単位で学生の能力に応じたeラーニングを行う。
- ② プラットフォーム上で専門と英語の教員が授業内容・役割分担など協働授業の運営について意識合わせを行う。

- ③ 授業はグループや協働での学び合いを積極化するため、上級学年生によるファシリテーターを導入する。
- ④ 学修成果の通用性を点検・確認するため、学修成果を社会に公表し、外部の助言を求める。
- ⑤ 学修到達度の確認は、グループ発表にどのように各個人が関与したかを学修ポートフォリオ上で相互評価させ、専門知識と英語表現について、それぞれ専門教員と英語教員がチェックする。

2.4 授業にICTを活用した学修内容・方法

以下に学修内容・方法の一例を紹介する。

- ① 専門分野の基礎知識をある程度理解させた上で協働授業を行う。理解の確認はネット上の小テストで理解度を点検し、理解度が不足している場合にはeラーニングで再学修させる。
- ② 学修内容に即した英語コンテンツを提示してグループで予習させ、内容を学修支援システム上に掲載させる。
- ③ 専門分野の教員と英語教員が、講読すべき原書やネット上の英語情報について事前に打合せを行い、オンライン・オフラインで学修者が効果的に修得できるようにする。
- ④ 授業ごとに発展学修を課して専門分野の英語語彙・表現の定着を図る。その際に、ファシリテーターが学修支援を行う。
- ⑤ 発展学修の成果は、グループでの発表や大学間での相互評価を行い、優れた成果をネット上で発信し、通用性を確認させる。

2.5 授業にICTを活用して期待される効果

- ① 理解度が不足している部分を繰り返しeラーニングで再学修できる。
- ② 学びの通用性についてグローバルに点検・確認ができ、学びを国際的な基準で判断できる。
- ③ 自立的に学びを展開し、学びを深めることに積極的に取り組む姿勢を身につけることができる。

2.6 授業にICTを活用した学修環境

- ① 学内外での授業交流、意見交流するためのプラットフォームが必要である。
- ② 国際社会に開かれた大学間のコンソーシアムを計画し、ネットを通じて学生の学びの成果が公表され、社会から評価が受けられる仕組みの構築が必要である。
- ③ 学修ポートフォリオシステム、ネット上での学びを支援するファシリテーターが必要である。

3. 改善モデルの授業の点検・評価・改善

この授業の点検・評価・改善は、診断テスト、到達度テスト、成果発表、アンケートや学修ポートフォリオなどを用いて、英語の教員・教科専門の教員が授業の進行・内容・成果及び協働の在り方と役割分担を評価シートに基づいて点検する。さらに、学内外を通じた教員同士のコンソーシアムのアドバイスを受ける。

4. 改善モデルの授業運営上の問題及び課題

- ① 専門教員と英語教員が協働での授業設計・運営が可能となるよう、大学ガバナンスとして教員同士による授業連携の仕組みを組織的に構築することが不可欠となる。
- ② 学内・学外を通じた教員同士のコンソーシアムを形成するために、大学としての組織的な支援が必要となる。
- ③ グループや協働での学修を積極かつ円滑にするため、上級学年生や大学院生によるファシリテーターを大学のガバナンスとして制度化し、学生目線での相談・助言が実現できるようにする。
- ④ 国際社会に情報を公開し、意見を求める際の注意事項として、人種・宗教・文化などの適切な表現についてガイドラインが必要となる。

第3節 改善モデルに必要な教育力、FD*活動と課題

【1】英語教員に期待される専門性

- ① 言語の多様性と文化の相互理解に強い関心を持ち、使命感と倫理観を持って共生社会の持続的な発展に関与できること。
- ② 言語・文化・社会の多面的価値を常に意識し、複眼的な視点から言語とコミュニケーションの在り方を探求できること。
- ③ 様々な領域に関心を持ち、英語教育について創造的かつ革新的な探究ができること。
- ④ 他分野の専門領域や社会と連携し、協働して課題に取り組む姿勢を有していること。
- ⑤ 言語と社会の結び付きの有用性に気付かせ、英語によるコミュニケーションに主体的・実践的に取り組ませられること。
- ⑥ ICTなどの教育に活用できる資源・技術・方法を用いて、積極的な参加を促す教育ができること。

【2】教育改善モデルに求められる教育力

- ① カリキュラムに反映された教育理念を十分に理解した上で、当該授業の位置付けを相互に共有し、協働して授業を実施、工夫・改善できること。
- ② 専門分野と社会との協働を通じて、英語を実践的に活用し、社会活動に参画できる教育計画をつくることができること。
- ③ 主体的な学修を実現するために、グループダイナミックスと相互評価を組み合わせる効果的な授業マネジメントができること。
- ④ 社会で活用できる実践的能力を身につけさせるため、対等の立場で専門分野の教員と役割を分担し、到達目標を提示することができること。
- ⑤ ICTなどを活用して教員・学生間のコミュニケーション、適切な教材作成、eラーニングの指導ができること。

【3】教育力を高めるためのFD活動と大学としての課題

(1) FD活動

- ① 大学の社会的責務と役割を十分に理解し、定期的な授業公開及び研修会などを開催し、授業改善に組織的に取り組む必要がある。
- ② 社会や他学部の教員と定期的に意見交換を行い、英語を実践的に活用するカリキュラムデザイン及び教育方法の研究会を通じて改善イメージを公表する場を設ける必要がある。
- ③ 学内外の専門家を招聘し、教育方法、教材作成などの指導を受ける研修会を設ける必要がある。
- ④ ティーチングポートフォリオ*や学生による授業評価などから、第三者による適切な評価・助言を受けて授業改善につなげる仕組みを設ける必要がある。

(2) 大学としての課題

- ① ICTを活用した教育方法を支援する体制を構築する必要がある。
- ② 学内外で意識を共有化し、教育方法、教材、評価方法・基準などのデータベース化を整備する必要がある。
- ③ アドミッション・カリキュラム・ディプロマのポリシー*に沿って、教員が行う主体的な取り組みを人的・財政的に支援・推進する必要がある。
- ④ 世界に通用する英語教育の質保証を持続的に行う必要がある。